

見解書

平成29年10月 〆日

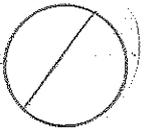
京都府知事 山田啓二 様

林地開発行為予定者

住所 東京都千代田区霞が関 3-2-5 霞が関ビル 31階

氏名 FS Japan Project6 合同会社

職務執行者 ビュフォード・ジェームス・エベレット



京都府林地開発行為の手続に関する条例第8条第1項の規定による見解は、下記のとおりです。

記

意見書の写しに記載された意見の概要	左記の意見に対する見解
別紙のとおり	別紙のとおり

備考 京都府個人情報保護条例第2条第1号に規定する個人情報（個人に関する情報であつて、個人が特定され得るもの（他の情報と照合することにより、個人が特定され得るものを含む。）をいいます。）については公表しませんが、その他の部分については本見解書を複写の上、原文のまま公表します。

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・自然環境を壊し、近くの住民生活に影響を与えるメガソーラー開発はやめてほしい。</p> <p>・砂子田川や谷に盛土にした造成地は弱く、ゲリラ豪雨が発生した場合、土砂崩れが心配</p>	<p>私どもは、太陽光発電によりクリーンで安全な再生可能エネルギーをつくりだし、日本における太陽光発電の普及・拡大を推進し、エネルギー、環境、地域への貢献を目指しています。</p> <p>本太陽光発電所は、山林の開発を伴いますが、日本のエネルギー政策を推進し、環境、地域へ貢献すると信じています。</p> <p>本太陽光発電所は、化石燃料に頼ることなく、運転中は二酸化炭素を排出せず、無駄な廃棄物の生成もなく、20年以上にわたりクリーンなエネルギーを提供します。そのエネルギーは一般家庭約10,000世帯に相当し、二酸化炭素の排出量削減量は、一般家庭約8,000世帯に相当します。</p> <p>このプロジェクトから生まれる税収は、長期間の安定的な地方財源となり行政サービスを介し地域へ還元されます。（現在、南山城村村民税約1.2億円に対し、本発電所は1億円程度（初年度）の納税となる見込みであり、納税に対し、地方交付税交付金が調整され実質約25%が増収となる見込みです。）太陽光発電所として、放置され荒廃しつつある山林や河川を整備することは、周辺生活者の災害等の危険や日常的な弊害・負担を軽減します。そして、太陽光発電所の建設中、又、完成した発電所の運営維持管理では、地域の雇用機会を創出し、祭事等地域活動への協力等により地域の活性化へ貢献します。</p> <p>私どもは、事業活動を行う地域社会への取り組みとして、開発の初期段階より近隣地区と数多くの会合や説明会等をおこなってきました。そして、地域の懸念を調整し、開発計画の見直し防災機能の更なる向上を図り、自主環境影響評価の実施により、周辺生活や環境への影響を評価し、影響の低減を図り事業を進めてきました。</p> <p>これらの取組を通じて、今山・奥田・押原地区より本事業にご理解いただき、協定を交わしています。その上で、広く南山城村村民に対し事業説明会等を開催し、より多くの方のご理解を得るべくすすめてきました。今後、南山城村とも協定を交わすことを考えており、広く村民にご安心いただけるようにしたいと考えています。</p> <p>当該区域は砂防指定地ですので、砂防法等の関係法令に従って土砂崩れ対策を施します。とりわけ砂子田川を埋設する箇所においては、住宅団地と同等以上の防災対策を施します。具体的には、谷底堆積物の地盤改良、地下暗渠の敷設・斜面段切工・高さ5mのふとん籠堰堤・高さ30cm単位での盛土転圧・レベル2地震動に対応した擁壁・安定勾配での法面整形・法面排水工・法面小段・防災小堤・法面植生といったものです。これらの技術は、「宅地防災マニュアル」に則ったものです。「宅地防災マニュアル」は、長年の宅地造成の技術と経験が蓄積されてまとめられたものです。私どもは本書に基づいた適切な施工を行います。</p> <p>防災に関する技術的な安全性については、砂防法は山城南土木事務所、森林法は山城広域振興局森づくり推進室、河川法（河川協議）は南山城村と協議を行い、それぞれの審査基準に基づき審査していただく予定です。また、技術力・実績のある大手建設会社が万全の体制で工事にあたります。</p>

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・沼状態の砂子田川や谷を盛土にしての造成は大雨時には非常に危険だと思います。開発予定地は健康の為に多くの近隣住民がウォーキングをしています。野鳥などで癒されます。メガソーラー設備から発生する音は聞きたくない。自然環境を破壊、住民に防災面で不安を与えるような開発計画は中止して下さい。</p>	<p>私どもは、太陽光発電によりクリーンで安全な再生可能エネルギーをつくりだし、日本における太陽光発電の普及・拡大を推進し、エネルギー、環境、地域への貢献を目指しています。</p> <p>本太陽光発電所は、山林の開発を伴いますが、日本のエネルギー政策を推進し、環境、地域へ貢献すると信じています。</p> <p>本太陽光発電所は、化石燃料に頼ることなく、運転中は二酸化炭素を排出せず、無駄な廃棄物の生成もなく、20年以上にわたりクリーンなエネルギーを提供します。そのエネルギーは一般家庭約10,000世帯に相当し、二酸化炭素の排出量削減量は、一般家庭約8,000世帯に相当します。</p> <p>このプロジェクトから生まれる税収は、長期間の安定的な地方財源となり行政サービスを介し地域へ還元されます。（現在、南山城村村民税約1.2億円に対し、本発電所は1億円程度（初年度）の納税となる見込みであり、納税に対し、地方交付税交付金が調整され実質約25%が増収となる見込みです。）太陽光発電所として、放置され荒廃しつつある山林や河川を整備することは、周辺生活者の災害等の危険や日常的な弊害・負担を軽減します。そして、太陽光発電所の建設中、又、完成した発電所の運営維持管理では、地域の雇用機会を創出し、祭事等地域活動への協力等により地域の活性化へ貢献します。</p> <p>私どもは、事業活動を行う地域社会への取り組みとして、開発の初期段階より近隣地区と数多くの会合や説明会等をおこなってきました。そして、地域の懸念を調整し、開発計画の見直し防災機能の更なる向上を図り、自主環境影響評価の実施により、周辺生活や環境への影響を評価し、影響の低減を図り事業を進めてきました。</p> <p>これらの取組を通じて、今山・奥田・押原地区より本事業にご理解いただき、協定を交わしています。その上で、広く南山城村村民に対し事業説明会等を開催し、より多くの方のご理解を得るべくすすめてきました。今後、南山城村とも協定を交わすことを考えており、広く村民にご安心いただけるようにしたいと考えています。</p> <p>当該区域は砂防指定地ですので、砂防法等の関係法令に従って土砂崩れ対策を施します。とりわけ砂子田川を埋設する箇所においては、住宅団地と同等以上の防災対策を施します。具体的には、谷底堆積物の地盤改良、地下暗渠の敷設・斜面段切工・高さ5mのふとん籠堰堤・高さ30cm単位での盛土転圧・レベル2地震動に対応した擁壁・安定勾配での法面整形・法面排水工・法面小段・防災小堤・法面植生といったものです。これらの技術は、「宅地防災マニュアル」に則ったものです。「宅地防災マニュアル」は、長年の宅地造成の技術と経験が蓄積されてまとめられたものです。私どもは本書に基づいた適切な施工を行います。</p> <p>防災に関する技術的な安全性については、砂防法は山城南土木事務所、森林法は山城広域振興局森づくり推進室、河川法（河川協議）は南山城村と協議を行い、それぞれの審査基準に基づき審査していただく予定です。また、技術力・実績のある大手建設会社が万全の体制で工事にあたります。</p>

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・地域説明会でも、開発事業者の企業モラルや親会社との関係などについて多々不信感を抱き、賛同し難い。</p> <p>・永年かけて作られてきた村の自然、地形、景観、更に生態系を壊わしてまで進めようとする今回の開発事業は、地域住民にはメリットなく断固反対である。永久不可欠な事業でない本件開発の為の破壊は回避すべき。</p>	<p>ファーストソーラーは、1999年米国で太陽光パネルメーカーとして誕生しました。太陽光パネルの製造・販売、太陽光発電事業のプロバイダー（太陽光発電所の開発、設計、建設、パネル販売、運営保守等のサービスを提供）として成長し、世界のトップシェアを有しています。その実績は、世界30カ国以上、11,000件を超えるプロジェクトに、13.5GWを超える太陽光パネルを設置しています。</p> <p>平成25年、ファーストソーラー・ジャパンを設立し東京オフィスを開設しました。国内では既に8ヶ所の太陽光発電所をつくり、現在、多くのプロジェクトを手がけています。その一例として石川県で、北陸地方最大規模となる太陽光発電所（約60MW）が、プロジェクト融資にて約270億円の事業資金を調達し、建設がすすめられています。</p> <p>本事業をおこなうためFS Japan Project 6 合同会社を設立し、事業をすすめています。</p> <p>ファーストソーラー（子会社及びその関連会社含む）との関係・役割は以下のとおりです。</p> <p>ファーストソーラー（米国）は、ファーストソーラー・ジャパン及びFS Japan Project 6 合同会社に対し、人・技術・資金等を支援します。</p> <p>ファーストソーラー・ジャパンが中心となり事業開発をおこないます。発電所の建設段階ではEPC（工事会社）のマネージメント、運営段階では運営管理を、ファーストソーラー・ジャパンが責任をもっておこないます。</p> <p>また、FS Japan Project 6 合同会社では、代表社員であるファーストソーラー・ジャパンの代表者が職務執行者を務め機関決定をおこないます。</p> <p>反社会勢力との関係は排除しています。</p> <p>私どもは、太陽光発電によりクリーンで安全な再生可能エネルギーをつくりだし、日本における太陽光発電の普及・拡大を推進し、エネルギー、環境、地域への貢献を目指しています。</p> <p>本太陽光発電所は、山林の開発を伴いますが、日本のエネルギー政策を推進し、環境、地域へ貢献すると信じています。</p> <p>本事業には、以下の社会的意義・地域への貢献があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ エネルギー政策の推進（本発電所では一般家庭約10,000世帯相当のクリーンな電力を供給）</li> <li>・ 再生可能エネルギーを通じ二酸化炭素の削減等、環境へ貢献</li> <li>・ 発電設備設置に伴う納税により地方財政へ貢献</li> <li>・ 周辺道路の整備により周辺地域の交通利便性・安全性が向上</li> </ul>

<p>・計画では、発電した電気は中部電力（遠く三重県上野市）に送る予定とのこと。事業の全体像も見えず、もっと需要地の近くに作るべき。なぜ関係ない当村が犠牲になるのか？</p> <p>また、本件土地開発だけを先行することは危険であり、施設の具体的構造や事業内容と合わせて審理されるべきである。</p> <p>・昨年の反対署名は2千名以上にのぼり、これは施設周辺地域の住民数以上、全村民でも7割以上にも及ぶ人が反対している。この反対数や各種報道をどう受け止めているのか？</p> <p>事業者に賛同する人がいるというが、その実数を明らかにしていない。</p> <p>・先に公示された縦覧資料及びこれまでの業者説明でも多々疑問や不明確さが見られ、容認できない。</p> <p>a) 安全の為に、西区中央（中谷川沿い）の谷を埋めフラットにし迂回排水路を設けるとしている点。</p> <p>・排水路は間口2m幅とするが、これはどの程度の雨量を想定しているのか？</p> <p>異常気象が進む中で、これまでの「想定」が通用しなくなっている。安全性が懸念される。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 桜等鑑賞樹を植樹し、賑わいを演出</li> <li>・ 放置された山林を、発電所として整備・維持管理することで、地域生活者の負担軽減、防災機能の向上</li> <li>・ 発電所の建設、維持管理等を通じて、地元企業や地域雇用の機会を創出</li> <li>・ 地域の祭事等への協賛等、地域コミュニティの促進に貢献</li> </ul> <p>発電所は、原子力や火力発電であれば臨海部等、発電方式の特性にあった適地があります。大規模太陽光発電所は日射が良く、広大な用地が確保できるところで建設されます。大需要地周辺では大規模な土地の確保は困難であり、又地価も高価であり建設が難しいことから、太陽光発電所は、大需要地から離れる傾向にあります。</p> <p>土地開発のみを先行しているわけではありません。</p> <p>私どもは、太陽光発電所の商業運転を目指し、事業を推進しています。京都サイトの造成計画や開発許可、自主環境影響評価、地元合意を、重点的におこない、並行して、三重サイトの開発計画、送電線に関する行政手続、建設工事会社の選定等をすすめており、今後、発電所の詳細設計や工事計画、発電所の運営管理計画をすすめます。発電所の設計等は、具体的な構造等含め、経済産業省の審査を受けます。</p> <p>開発許可等、準備が整った段階で本体工事に着手します。工事着手後は、造成工事完了時に行政の検査、発電設備工事完了時には経済産業省の検査を受けます。それらを、ひとつずつクリアーし、太陽光発電所を商業運転させます。</p> <p>私どもは、事業活動を行う地域社会への取り組みとして、開発の初期段階より近隣地区と数多くの会合や説明会等をおこなってきました。そして、地域の懸念を調整し、開発計画の見直し防災機能の更なる向上を図り、自主環境影響評価の実施により、周辺生活や環境への影響を評価し、影響の低減を図り事業を進めてきました。</p> <p>これらの取組を通じて、今山・奥田・押原地区より本事業にご理解いただき、協定を交わしています。その上で、広く南山城村村民に対し事業説明会等を開催し、より多くの方のご理解を得るべくすすめてきました。今後、南山城村とも協定を交わすことを考えており、広く村民にご安心いただけるようにしたいと考えています。</p> <p>a)</p> <p>付替水路の設計で想定する降雨量は、112.76mm/hr（1/10年降雨確率）です。</p> <p>洪水対策として調整池を整備します。事業地から出る雨水は一旦調整池で貯留し放流します。これにより従来の山林の持つ洪水緩和の機能を果たします。</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>・計画は、降雨の流れ道を遮る構造で、谷を埋めること、流れを迂回させることがなぜ安全なのか理解できない。</p> <p>・業者は、その理由として整地壁面を盛土することの崩落危険性を挙げる。しかし、豪雨時には大量の濁流や流出した樹木等が一気に押し寄せる為、狭い排水路は堰き止められ濁流池を作る。これは常に決壊の危険性に晒され、一端決壊すると殿田川に合流し甚大な被害を齎す。奥田地区は生活道路を失う。</p> <p>・濁流は流れにまかせた今の状態が自然であり、本件のように迂回させる必要はない。</p> <p>・排水路は西区の東側斜面に沿って設ける設計だが、決壊や土砂堆積によるオーバーフローの危険性が否定できない。 ⇒NTでは、造成後も何度となく斜面崩落を経験しており、最近では30年近く経って発生した例もある。(1993年豪雨による西側外周道路の崩落)</p> <p>・盛土が危険ならば、東区はなぜ盛土にするのか？</p>	<p>本工事によって、山林を伐採することは事実ですが、それに見合う以上の非常に大きな調整池を設置しますので、結果的には、元の山林の状態よりはピーク時雨水量は減少します。従いまして、洪水リスクとしては現況よりも安全側に働きます。昨今の異常気象の頻出により全国的に水害リスクは上昇しつつあります。そのような状況下において、本件が整備されれば洪水リスクは安全側に働きます。</p> <p>但し、雨水量が抑制されるのは当該開発地内から出る分のみです。開発地外から出る分は従前のままですので、治水上のリスクが解消された訳ではないのでご注意ください。</p> <p>防災に関する技術的な安全性については、砂防法は山城南土木事務所、森林法は山城広域振興局森づくり推進室、河川法（河川協議）は南山城村と協議を行い、それぞれの審査基準に基づき審査していただく予定です。また、技術力・実績のある大手建設会社が万全の体制で工事にあたります。</p> <p>洪水は、ピーク時の水位が堤防高を越えることで発生します。迂回させることで、各溪流を流れる水位のピーク時間にズレが生じます。ズレによって合流後の水位の変化が緩和されます。急激に水位が上昇するという水系の形質でなくなるということです。</p> <p>従前の計画は、河川兩岸に高さ約20mの腹付高盛土を行うものでした。それ故に崩落危険性を考慮して、切土地盤を通す計画に変更いたしました。これにより、腹付盛土が解消され、水路の側面の法面が崩壊してダムとなるリスクは軽減されています。次に、濁流によって上流より大量の流木等が排水路に流出した場合におきましては、砂防技術基準に基づいた豪雨時に対応した流下能力のある断面を確保いたします。大きな縮尺の図では狭く感じられますが、水路は、管理用通路と幅6m道路に挟まれております。切り通し部の底幅は全体で14.5mあります。これは現状の谷の狭窄部と同程度の幅になります。極めて大量の流木が供給されない限り天然ダム形成の危険性は極めて少ないと判断しています。</p> <p>私どもとしましては、自然・人工にかかわらず水理的に十分な断面・勾配が確保されていれば、迂回させても問題はないという認識です。</p> <p>付替水路は、掘込河川であり堤体がないため決壊はありません。オーバーフローについては危険性はゼロであるとは申し上げられませんが、基準に則った適切な流下能力を確保しています。</p> <p>東工区においても西工区と同様に切土・盛土があります。ご指摘の「盛土」が「腹付盛土」という意味でしたら、東工区における盛土箇所は盛土面が谷に対して直角方向であり、腹付盛土ではありません。腹付盛土とは、現</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>・埋め立て谷部は設置面が切土になるように後退させればよいのであり、埋立てや迂回排水路とは関係ない問題。 結局は、設置面積率を高める為の業者側都合によるものでしかなく、納得できない。</p> <p>b) 豪雨対策</p> <p>・貯留池はどの程度の雨量を想定しどのように管理されるのか? 常に空状態でなければ、豪雨時には役に立たない。</p> <p>・適切な間隔で排水管渠を設けるとしているが、傾斜したパネルから流れ出す降雨を渠に回収できるのか? 特に、豪雨時は渠に回収されない場合あり、斜面から流れ出るのは?</p> <p>・開発地の豪雨は自然浸透が少なく、また広大であるために短時間で下流河川に流出し被害拡大を招く恐れがある。</p> <p>c) 事業者は事業期間を暫定 20 年とし、期間終了後は現状回復し植樹するとしている。</p> <p>・現状回復の具体的内容が示されていない。 (西区の埋めた谷を元に戻し、調整池や排水路を撤去するのか?)</p> <p>・無用な調整池やいつ崩壊するか分からない迂回排水路がそのままでは危険。 また、調整池の維持管理(監視、水抜きなど)はどうするのか?</p> <p>・撤去閉鎖時にそのような危険遺産を残されても住民には迷惑である。調整池は使い道なし。</p>	<p>地盤の山肌に擦り付けるように盛る状態であり、盛土面は現地盤面に対して平行になります。</p> <p>砂子谷川の両岸には盛土をせず、自然地形のままにすればよいのではないかと、という意味だと推察します。この場合、切土で発生した大量の土砂が処分に困ることになります。場外に搬出するとダンプが地域を頻繁に通るようになり、大きな問題となります。したがって切盛の土量バランスを行い場内で処分する計画とした次第です。</p> <p>b)</p> <p>調整池では、156mm/hr (1/50 年降雨確率) の雨量を貯留します。一年に一度定期的に土砂を浚渫します。常時は空の状態です。</p> <p>地表面には水勾配がついています。パネルに降った雨は、地表面を伝って排水管渠へ流入します。斜面と造成平面との境界には、高さ 50cm の防災小堤を設置し、斜面への雨水流出を防止しています。</p> <p>洪水対策として調整池を整備します。事業地から出る雨水は一旦調整池で貯留し放流します。これにより従来の山林の持つ洪水緩和の機能を果たします。 本工事によって、山林を伐採することは事実ですが、それに見合う以上の非常に大きな調整池を設置しますので、結果的には、元の山林の状態よりはピーク時雨水量は減少します。従いまして、洪水リスクとしては現況よりも安全側に働きます。昨今の異常気象の頻出により全国的に水害リスクは上昇しつつあります。そのような状況下において、本件が整備されれば洪水リスクは安全側に働きます。 但し、雨水量が抑制されるのは当該開発地内から出る分のみです。開発地外から出る分は従前のままですので、治水上のリスクが解消された訳ではないのでご注意ください。 防災に関する技術的な安全性については、砂防法は山城南土木事務所、森林法は山城広域振興局森づくり推進室、河川法(河川協議)は南山城村と協議を行い、それぞれの審査基準に基づき審査していただく予定です。また、技術力・実績のある大手建設会社が万全の体制で工事にあたります。</p> <p>c)</p> <p>本事業終了時は、発電設備を撤去します。(改変した地形は、そのままです。)撤去・植林計画の詳細は、撤去時期に関係者と協議の上、決定します。その費用は、事業計画に適切に見込んでいます。 私どもは、南山城村へ事業計画を提出すること、南山城村と協定を締結すること、協定に撤去を約定すること等を考えています。これらにより、皆様方がご安心いただけるようにしたいと考えています。</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>・NTでは、これまでも業者による隣接地の開発(西山開発)が行われたことがあるが、工事途中で断念され、今もそのまま放置されている。 (⇒事故や犯罪の危険性が考えられる)</p> <p>d) 電磁波の問題について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・縦覧資料では、「電磁波の暴露は人間に無害」としながらも、説明会では数件の事例報告を認めている。</li> <li>・しかし、今回の事業計画はメガ級の規模で、比較レベルは大きく異なる。</li> <li>・高圧電流と電磁波との関係性はここまでにも常に指摘・報道されており、危険性が全く解消されず数件の報告を認める以上、「電磁波の影響はない。」とは言えないはず。</li> <li>・業者主張は「未だ検証されていない」というだけでことで、絶対的な安全ではない。</li> <li>・被害があっても、一般住民には因果関係の証明は困難で、泣き寝入りになる。</li> </ul> <p>・また西区で集めた電気は、どこをどのような工法で、東区側に送るのか？その送電は少なくとも奥田地域への生活道路と交差し、また近くの水田作業者にも影響大。</p>	<p>事業者は、地権者に対し撤去義務を有しています。また、敷金等により保全措置が図られています。</p> <p>ご指摘の西山開発が工事途中で頓挫した理由はわかりませんが、私どもは、適切な事業計画があり、資金調達能力を有していることから、工事途中で断念することは考えられません。</p> <p>d)</p> <p>説明会では、以下のように説明しています。電磁波と人の健康との関連について、人や動物などを対象として、約1950件の研究が、世界各国で行われる。その結果、ごく一部の研究で、電磁波と小児白血病との関連が示唆されましたが、大部分の研究では、電磁波と健康への悪影響との関連は見られない。2007年 世界保健機関(WHO)は、それらの多くの研究結果を総合的に判断して、電磁波と小児白血病との関連の証拠は弱く因果関係とは見なせないという結論を出す。</p> <p>パワーコンディショナーから発生する交流磁界は、出力に依存し、電流が大きくなれば交流磁界の大きさも大きくなります。そこで、本事業で設置予定のパワーコンディショナーと同等クラスのパワーコンディショナーを設置している類似施設(665kW×2台)における交流磁界の実測を行いました。その結果、最大実測値は60.59μT(0.2m距離)であり、そこから約35m離れた発電所敷地境界では0.732μT(最大実測値)と大きく減衰していました。この数値は、現在の南山城小学校の周辺における0.810μT(最大実測値)と同等レベルであることから、パワーコンディショナーから発生する磁界は、距離が離れると大きく減衰し、30m程度離れた場所ではその影響がほとんどなくなるものと推測されます。</p> <p>さらに、本事業では、事業計画地周辺の既存の山地に加え、事業計画地の外周部に残置森林や造成森林、管理用道路等を配置する計画としており、太陽光発電システムと事業計画地周辺の住居等とは数十m～数百m程度の離隔を設ける計画としています。</p> <p>したがって、事業計画地周辺に電磁界による影響を及ぼすおそれはないものと考えています。</p> <p>なお、詳細につきましては、自主環境影響評価の最終報告書に記載しております。</p> <p>送電ルートは、以下を計画し、協議をすすめています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・京都サイト(西工区)～(東工区)：本計画で拡張する道へ地中敷設(22KV)</li> <li>・京都サイト(東工区)～三重サイト：中谷川を架空線(22KV)で横断</li> <li>・三重サイト～変電所(伊賀市大野木)：国道163号線へ地中埋設(22KV)、中部電力鉄塔へ接続</li> </ul> <p>今回、拡張道路への埋設を懸念する、ご意見もありましたので、東工区と西工区間は、最短ルートを架空線で対応する等、他のルートの可能性も検討します。</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

e) 反射光の影響について

- ・本件では、施設周辺に高層施設はなく、「反射光の影響はない」としている。しかし、施設西側には山上の童仙房地域へ通じる生活道路がある。これは、急勾配で、一瞬でもその反射光が下山する車の運転者に当たれば影響大。重大事故の原因となり非常に危険。
- ・事業者は、全季節、全時間帯を通じて影響を検証すべき。

f) 周辺施設への温度影響

- ・縦覧資料では、気温影響の問題について、「屋根瓦などと比較し、熱吸収しないので影響はない」とし、土地の被覆方法で対応するとしている。反射光を無視し、論拠に欠ける。
- ・また、説明会で業者が説明する、那須烏山太陽光発電所とは、その図面でみても本件と比較にならない程の小規模と推測される。  
規模が全くことなり気温変化の比較になりえず、その観測方法も明確ではない。メガソーラーにおける上空温度の比較を示すべき。

- ・大量のパネルからの反射光は、周辺温度を高め上昇気流(竜巻)を作る原因となる。

g) 景観について

- ・説明や縦覧資料では、景観への影響について、NTの集会所2階、保健福祉センター、駅ホーム、三国林道の4地点を挙げ、「視認できない」としている。
- ・しかし、その判断は事業施設の中心点を見たもので、施設周辺部は明らかに目視されるが無視されている。
- ・また前記4か所を選んだ根拠も明確ではない。例えば、NTには集会所より高い宅地は多く、更に田山割尾坂地域や総合グラウンドからは完全に一望される。  
業者は、意図的に目視性の少ない地域を選択したとしか思えない。

e)

太陽の方位が東(90°)または西(270°)より南側で、かつ仰角を0°(最も反射光の角度が低くなる)とした場合、北側への反射光は水平より30°の角度となります。

その場合、事業実施区域から500m離れた場所ではパネル高さから約290m以上の高さに反射光が到達することとなり、建物はもちろん、道路も存在しません。

また、太陽の方位が東(90°)または西(270°)より北側にある場合は、自主環境影響評価におけるシミュレーションの結果、住宅等への影響はないものと予測しております。

なお、使用するパネルは反射防止加工がされているため、基本的に、反射光による影響はないものと考えています。

f)

基本的に、使用するソーラーパネルは反射防止加工がされており、また太陽光の一部を電力に変換するため、白い屋根や建物等と比べると反射光(可視光域だけではなく、全周波数帯の光を含みます。)は少なくなります。一般に、太陽光はまず地面を温め、その温められた地面から放射される熱が大気を温めます。その地面から放射される熱は土地の被覆状況の違い(裸地、アスファルト、草地など)によって異なります。本計画においては、森林であった土地が裸地+ソーラーパネルに変わることによる影響が大きいと想定されるため、自主環境影響評価(縦覧資料)では土地の被覆状況について言及しています。科学的知見が少ないため定量的な予測ができませんが、太陽光をほとんど反射することなく蓄熱して周辺温度を上昇させる駐車場(アスファルト)などと比べると影響は小さいものと考えています。

太陽光によって温められた地面から放射される熱によって温められた空気は、上昇します。そのため、ソーラーパネルによって温められた空気も上昇し、上昇気流が発生するものと思われませんが、住宅団地や大規模駐車場と同程度と考えられ、竜巻やゲリラ豪雨の直接的な原因にはなりにくいものと考えています。

g)

まず、その四地点において、「視認できない」ではなく。「著しい違和感をあたえるものではない」と説明しています。

景観の予測ポイントについては、地域の景観特性の変化の程度及び代表的な眺望地点からの眺望の変化の程度を把握することを目的とし、不特定多数の方が利用される場所(駅、学校等の公共施設、展望台など)を中心に選定しています。ただし、ご指摘のご要望を踏まえまして、地元住民の方の立ち合いのもと景観予測ポイントを追加し、南山城小学校グラウンドや月ヶ瀬ニュータウンの高所等のフォト

<p>h) 生態系への影響について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの地域説明会でも、生態系の問題は度々意見が出ていたが、縦覧資料ではそのことは全く触れられていない。なぜか?</li> <li>・自然環境、・地形、生体系を壊してまで開発する理由はない。</li> </ul> <p>i) 高台上へのパネル設置について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・強風によるソーラーパネルの飛散崩壊がしばしば報道されている。</li> <li>・今回計画のような高台上に傾斜したソーラーパネルを設置した場合、横や下方からの強風を受け易く、パネルが飛散する危険性が高い。</li> <li>・周囲気温の上昇や異常気象に伴う竜巻の可能性も否定できない。</li> <li>・パネルはどのような構造で設置するのか?</li> </ul> <p>以上</p>	<p>モニタージュを作成しました。その結果、景観に著しい違和感を与えることはないものと判断しています。</p> <p>なお、詳細につきましては、自主環境影響評価の最終報告書に記載しております。</p> <p>h)</p> <p>生態系への影響評価は、生物調査終了後に実施する予定としていたため、縦覧資料（自主環境影響評価中間報告書）には記載していませんでした。</p> <p>生態系への影響予測を行った結果、事業計画地及びその周辺に生息・生育する動植物の種構成の変化にまで影響が及ぶ可能性は小さいと判断し、食物網が変化するような影響は生じないものと予測しました。したがって、事業の実施による地域の生態系への著しい影響はないものと考えています。</p> <p>詳細については、最終の自主環境影響評価書に記載しています。</p> <p>i)</p> <p>経済産業省（所管庁）が、近年の事故事例を分析しその内容を公表しています。経済産業省新エネルギー発電設備事故対応・構造WGによると、事業用太陽光発電設備による重大事故（感電事故や500kw以上の設備破壊等）の報告は僅少です。他方、昨今の自然災害に伴い、パネルの飛散、架台倒壊、設備水没等、公衆安全に影響を与える重大事故が発生しています。特に事故報告対象外の小規模設備で倒壊事故が顕在化しています。</p> <p>追跡調査の結果、工事計画・使用前安全管理検査の対象となった2MW以上の設備では、構造強度に起因する重大な損壊は発生していません。</p> <p>そのことから、検査対象外の小規模な発電所が、強度計算を怠る等、専門性や経験の不足する事業者や業者が設置したこと等に起因すると考えられています。</p> <p>私どもの発電所は、法的に諸官庁の検査対象であり、適切な設計・強度計算等がおこなわれていることが確認されます。</p> <p>本発電所の詳細設計は、大規模太陽光発電所の実績を有し技術力を有するEPCが設計を行い、ファーストソーラージャパンがEPCのマネジメントを行います。</p> <p>発電所は、関係する国際、国内、地域の規格及び基準に従って設計され、大規模太陽光発電所として、十分な機能・品質・安全性を確保します。設計では、風速、積雪等を含め強度や構造計算を行います。そのことにより、太陽光パネルの飛散、架台の損壊等を防ぎます。</p> <p>更に、本発電所は、電気事業法に定める特別高圧発電所（出力2MW以上）であり、法の定めにより経済産業省産業保安監督部へ工事計画届出書の提出義務があります。工事計画届では、設計内容に関し、電気的な分野のみならず、構造計算他、厳格な審査を受けます。その審査に合格して、はじめて発電設備の工事に着手できます。発電設備工事完了後、使用前自主検査を実施し、経済産業省産業保安監督部の検査を受けます。</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

太陽光パネルは、そのフレームをボルトで架台と固定することになります。(S6  
モジュールの場合)

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>1) FS Japan Project 6 合同会社の「企業倫理」は信頼できるのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業終了まで直接管理し、誠意を持って協定書内容遵守について表明すること。</li> <li>・また、反社会勢力に関する一切の疑義解消を図ること。</li> </ul> <p>2) 西工区の谷埋め工法について防災上の向上策を再検討すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・谷埋め盛土工法について防災上、より安定化を図れる対策を再検討すること。</li> </ul> <p>3) 自主環境アセスメントにより判明した希少動植物等の影響を最大限低減すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告を公開するとともに、京都府の指導を含めた希少動植物等の影響を最大限低減すること。</li> </ul>	<p>本事業終了まで本発電所を適切に管理し、協定は誠意をもって遵守することを表明します。</p> <p>本事業では、建設完了後、ファーストソーラーが運営・保守管理をおこなう予定です。ファーストソーラーは、太陽光発電所の運営・保守管理の豊富な経験を有しており、現在、世界で約 5,400MW、国内では約 100MW を受託しています。ファーストソーラーは効率的かつ責任のあるかたちで太陽光発電所を運営・維持することが重要だと考えており、太陽光発電所をリアルタイムに監視するために、専門のスタッフチームが東京のオペレーションセンターに駐在しています。また、保守管理をおこなうため、専任の電気主任技術者や保安スタッフチームが現場管理事務所に駐在する予定です。24 時間週 7 日の監視体制に加え、毎月保守点検が実施されます。また、緊急時は、保守サービスチームが 2 時間以内にかけてつける体制を整えます。</p> <p>私どもの合併、本施設の譲渡その他の理由により、協定書の権利義務を第三者に承継する必要が生じたときは、本協定書の権利義務を、その承継を必要とする者に承継します。</p> <p>反社会勢力との関係は排除しています。</p> <p>本造成計画は、砂防法及び林地開発許可等の技術基準に基づくと共に、更に宅地造成マニュアルを準用し設計しており、各法・許認可が求める技術基準に基づいて設計しています。</p> <p>特に西工区の谷盛土部分は、技術水準以上の地下防災設備を設置することで、更なる防災上の安定性を追及しています。具体的には、布団籠堰堤の設置数や暗渠管の排水能力、仮設沈砂池の容量において技術水準以上のものを設置しています。擁壁等は、構造計算や地盤調査に基づき必要に応じて地盤改良工法等を用い、構造物の安定化を図ります。</p> <p>防災に関する技術的な安全性については、砂防法は山城南土木事務所、森林法は山城広域振興局森づくり推進室、河川法（河川協議）は南山城村と協議を行い、それぞれの審査基準に基づき審査していただく予定です。また、技術力・実績のある大手建設会社が万全の体制で工事にあたります。</p> <p>京都府や専門家の指導を踏まえ、希少動植物等の影響を最大限低減するように努めます。本計画では、事業計画地内の改変区域を極力小さくして改変区域に近接する水田や湿地の外縁部から改変区域までの数十 m の森林を残置するなど、森林及び水田や湿地に生息・生育する動植物に最大限配慮しています。また、希少動植物の移植等についても検討を進めています。</p>

<p>パネル等の産業廃棄物に対し重量と処理方法を明確にすること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業終了時の、パネル等の産業廃棄物に対し概算重量と処理方法を明確にすること。</li> </ul> <p>5) 南山城村との協定を締結すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長期にわたる事業であることや、村全体に及ぶ自然環境影響評価並びに事業終了時の植林復旧、土地活用変更等、住民にとっての重要事項に対応できるのは行政であり、協定は是非必要である。</li> </ul> <p>6) 意見書提出期限後の意見については、真摯に受けとめ誠意をもって文書で回答すること。</p>	<p>環境影響評価報告書（最終版）は、京都府及び南山城村へ提出します。また公開を予定しています。中間報告書と同様に南山城村役場で閲覧できるよう協力を依頼しています。</p> <p>当発電設備撤去時は、太陽光パネル、架台、銅線類、機器類等が発生し、その過半を太陽光パネルと架台が占め、概算重量は8,000 tを超える見込みです。発生物は、法・規制等に従い、リサイクルに適するものはリサイクルの推進を図り、産業廃棄物は廃棄物処理施設等で処理します。</p> <p>一般的に、国内ではアルミ製架台や銅線等はリサイクルされ、太陽光パネルは産業廃棄物として処理されています。ファーストソーラーの太陽光パネルは、海外工場にあるリサイクル施設でリサイクルできます。</p> <p>今後、環境省が「太陽光発電設備のリサイクル等の推進にむけたガイドライン」を策定する見込みであり、同ガイドラインを尊重し一層リサイクルの推進に努めます。</p> <p>私どもは、地元自治体である南山城村と協定を交わすことを考えています。</p> <p>意見書提出期限後の意見については、地区を經由してご提出いただくか、又は、私どもへ直接お問い合わせ願います。内容を確認の上、文書での回答等適切に対応致します。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・ニュータウンの住民です。自然に囲まれて暮らす私にとっては理想郷です。この村では自然の営みが脈々と受けつがれていて、自然哲学を学んでいます。南山城村に生息している固有種を絶やしたくない、大切にしたい。</p>	<p>本事業では、開発計画及び自主環境影響評価を通じ、自然環境や周辺生活環境へ配慮した取組を行っています。</p> <p>外周部を中心に森林等を確保し開発地と周辺との緩衝帯として、景観、騒音、生物環境等への環境影響の低減に努めています。加えて、開発地内では、在来種の植林や既山林の表土を再利用することで、既存種の再生を図る計画です。</p> <p>予め自主環境影響評価をおこない、できる限り環境への負荷が低減できるような事業計画に努めております。</p> <p>自主環境影響評価では、京都府の技術指針に準じつつ、更に本事業特有の環境影響評価項目を追加することで、より地域の実情に即した環境影響評価としています。</p> <p>実施にあたっては、専門家や京都府の指導を仰ぎながら、景観や騒音等、周辺への影響を調査、予測・評価し必要な対策を検討してきました。また、四季を通じた生物調査をおこない、重要な動植物等の保全措置を行う予定です。</p> <p>事業説明会等では、自主環境影響評価（中間報告）を元に、その評価結果を説明してきました。最終報告書は、京都府のご確認を頂いた後に、南山城村役場で閲覧できるようにする予定です。</p>

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・災害防止等の為、現状そのままの地形を保ってほしい。</p>	<p>本造成計画は、砂防法及び林地開発許可等の技術基準に基づくと共に、更に宅地造成マニュアルを準用し設計しており、各法・許認可が求める技術基準に基づいて設計しています。</p> <p>特に西工区の谷盛土部分は、技術水準以上の地下防災設備を設置することで、更なる防災上の安定性を追及しています。具体的には、布団籠堰堤の設置数や暗渠管の排水能力、仮設沈砂池の容量において技術水準以上のものを設置しています。擁壁等は、構造計算や地盤調査に基づき必要に応じて地盤改良工法等を用い、構造物の安定化を図ります。</p> <p>防災に関する技術的な安全性については、砂防法は山城南土木事務所、森林法は山城広域振興局森づくり推進室、河川法（河川協議）は南山城村と協議を行い、それぞれの審査基準に基づき審査していただく予定です。また、技術力・実績のある大手建設会社が万全の体制で工事にあたります。</p>

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・今の自然環境を子供たちにも残したいので、計画に反対します。</p>	<p>わたしたちの暮らしには、多くのエネルギーが必要です。日本では、福島原発事故を契機に、多くの人々がエネルギーについて関心を持ち、考え、行動する機会を得ました。</p> <p>私どもは、環境への影響の低減を図りながら、太陽光発電所を整備することを通じて、社会へ貢献すると考えています。一方、開発してまで太陽光発電所を建設すべきではないとのご意見もあります。日々、地球規模で環境問題は深刻化しており、何らかの方法でエネルギーが抱える問題を解決をする必要があります。</p> <p>子どもたちに、すばらしい未来を残したいというお気持ちは皆一緒だと思います。何を残すべきなのか、私ども及び本計画にご賛同された地元の方々は、ここに太陽光発電所をつくること、子ども達の未来につながると考えています。</p>

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・太陽光パネルカドミウムテルルの毒性について 自然災害等での破損による流出の恐れがあるため、その毒性について明確にすること</p> <p>・20年後の林野復旧図とパネル、架台等の処理について 数年では元の林野には戻らないし、地権者が更地を他に転用したいと要望した場合、何をもとに対処するか。また、産業廃棄物としての太陽光パネル等の処理は、どのようにするのか明確にすること</p> <p>・電磁波の健康影響度と対策について 公共施設や民家に近接しているため、健康影響度と対策について明確にすること</p>	<p>ファースト・ソーラーの薄膜太陽光発電技術は、安全で高い信頼性の性能実績があります。ファースト・ソーラーの太陽光パネルは、破損、火災、洪水、雹（ひょう）時の安全性について試験を行っており、ISO、IEC、TÜV、米国 VDE、UL および JET を含む世界中の第三者試験機関によってその安全性と品質基準が認定されています。</p> <p>（東京大学、横浜国立大学を含む）主要な国際機関の研究者 40 人以上によって、ファースト・ソーラーの太陽光発電パネルは、通常の使用、予見可能な事故時、耐用年数を経た後のリサイクルと廃棄の段階において、人間の健康や環境に対して安全であることが確認されています。</p> <p>ファースト・ソーラーの太陽光パネルは、世界中で使用が認められており、ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、米国、カナダ、オーストラリア、タイ、および他の多くの国で設置されています。世界 30 ヶ国以上、11,000 件以上のプロジェクトに対し、13,500MW の設置実績があります。</p> <p>仮に埋立処分を行った場合においても、環境基準上問題がないことが確認されています。</p> <p>本事業終了時は、発電設備を撤去します。（改変した地形は、そのままです。）撤去・植林計画の詳細は、撤去時期に関係者と協議の上、決定します。その費用は、事業計画に適切に見込んでいます。</p> <p>私どもは、南山城村へ事業計画を提出すること、南山城村と協定を締結すること、協定に撤去を約定すること等を考えています。これらにより、皆様方がご安心いただけるようにしたいと考えています。</p> <p>事業者は、地権者に対し撤去義務を有しています。また、敷金等により保全措置が図られています。</p> <p>撤去等終了後、事業地は地権者へ返還します。その後の土地活用に関し、私どもはコメントする立場にありません。将来の土地利用は、その規模、用途、造成の有無等により、砂防法や環境影響評価条例等、各種条例等に対応する必要があります。</p> <p>発生物は、法・規制等に従い、リサイクルに適するものはリサイクルの推進を図り、産業廃棄物は廃棄物処理施設等で処理します。</p> <p>パワーコンディショナーから発生する交流磁界は、出力に依存し、電流が大きくなれば交流磁界の大きさも大きくなります。そこで、本事業で設置予定のパワーコンディショナーと同等クラスのパワーコンディショナーを設置している類似施設（665kW×2台）における交流磁界の実測を行いました。その結果、最大実測値は 60.59<math>\mu</math>T（0.2m 距離）であり、そこから約 35m 離れた発電所敷地境界では 0.732<math>\mu</math>T（最大実測値）と大</p>

大きく減衰していました。この数値は、現在の南山城小学校の周辺における  $0.810\mu\text{T}$ （最大実測値）と同等レベルであることから、パワーコンディショナーから発生する磁界は、距離が離れると大きく減衰し、30m 程度離れた場所ではその影響がほとんどなくなるものと推測されます。

さらに、本事業では、事業計画地周辺の既存の山地に加え、事業計画地の外周部に残置森林や造成森林、管理用道路等を配置する計画としており、太陽光発電システムと事業計画地周辺の住居等とは数十 m～数百 m 程度の離隔を設ける計画としています。

したがって、事業計画地周辺に電磁界による影響を及ぼすおそれはないものと考えています。

P	左記意見に対する見解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・美しい自然がなくなる。</li> <li>・開発面積があまりに広大に過ぎること。</li>   <li>・森林伐採で希少な生物が絶滅するのいやです。</li> </ul>	<p>私どもは、太陽光発電によりクリーンで安全な再生可能エネルギーをつくりだし、日本における太陽光発電の普及・拡大を推進し、エネルギー、環境、地域への貢献を目指しています。</p> <p>本太陽光発電所は、山林の開発を伴いますが、日本のエネルギー政策を推進し、環境、地域へ貢献すると信じています。</p> <p>京都府や専門家の指導を踏まえ、希少動植物等の影響を最大限低減するように努めます。本計画では、事業計画地内の改変区域を極力小さくして改変区域に近接する水田や湿地の外縁部から改変区域までの数十 m の森林を残置するなど、森林及び水田や湿地に生息・生育する動植物に最大限配慮しています。また、希少動植物の移植等についても検討を進めています。</p>

意見書の写しに記載された意見の概要	左記意見に対する見解
<p>・グリーン GDP に関して質問 環境調整済国内総生産 国内純生産（国内総生産＝GDP から自然資源の消耗分を差し引いたもの）から環境に関する外部不経済を貨幣評価した費用（帰属環境費用）を控除した「環境調整済国内総生産」EDP : Eco Domestic Product のこと。国の経済の状況を示す指標としては GNP（国民総生産）や GDP（国内総生産）があるが、これらには環境汚染による国民生活の質の低下や、野生生物種などの枯渇が将来世代の選択の幅を狭めていることなどが反映されていない。そこで、経済政策の分野で環境に配慮した意志決定を行うために環境と経済との関わりを総合的に評価しうる指標の開発が求められてきた。グリーン GDP やグリーン GNP はこの考え方によるものである。これらに関し国も取り組んでいる。</p> <p>この考え方を今回の開発にあてはめて以下のことについて答えてもらいたい。</p> <p>・生産物の価値（電力）か自然環境破壊による自然資源の減耗分を差し引いたものが貨幣価値にしてどのくらいになるのか明確に示してもらいたい。これらによって南山城住民が被る被害額と恩恵を受けるものの価値はそれぞれどのくらいになるのか示すこと。</p> <p>・20 年後に林野に復元するとしているが、その資金をどうするのか。明確にすること。例えば 5 億円必要とすればそれを村に供託金として 20 年間預けるなど。</p>	<p>残念ながら、私どもには、グリーン GDP を適切に算出することはできませんが、環境と経済のバランスを総合的に判断するという考え方は重要だと考えます。</p> <p>帰属環境費用には、大気汚染、水質汚濁、土地・森林等の使用、土地開発、森林伐採、地下資源の枯渇（石炭、石灰石、亜鉛）、地球環境への影響（二酸化炭素の排出による地球温暖化）等があるようです。</p> <p>上記から、本太陽光発電所は、土地開発・森林伐採が該当すると考えます。一方、化石燃料を燃焼し発電する場合、大気汚染、地球環境への影響に対し大きなインパクトを与えていますが、太陽光発電に置き換えることにより、大きなプラスをなります。その分と土地開発、森林伐採を比較し、どちらの勘定が多いのか、ということだと考えます。</p> <p>本事業終了時は、発電設備を撤去します。（改変した地形は、そのままです。）撤去・植林計画の詳細は、撤去時期に関係者と協議の上、決定します。その費用は、事業計画に適切に見込んでいます。</p> <p>私どもは、南山城村へ事業計画を提出すること、南山城村と協定を締結すること、協定に撤去を約定すること等を考えています。これらにより、皆様方がご安心いただけるようにしたいと考えています。</p> <p>事業者は、地権者に対し撤去義務を有しています。また、敷金等により保全措置が図られています。</p> <p>行政への供託や預託等は、対応する制度がありませんでした。</p>